

# ストーリー

去年の西千葉子ども起業塾から約一年経った、ある晴れた夏の日。

西千葉子ども起業塾の太田塾長は第三土曜日に遊びにきていた。

和やかな雰囲気の中、浮かない顔をしてふくろう広場の一角で商店街の人々がなにやら話をしていた。

塾長はそっと近づき木の影から話を聞いてみた。

海保さん「あれから一年すぎたなあーでも何か足りないんだよなあ」

木村さん「何がですか??」

海保さん「何か足りない気がするんだよ。確かに、前より第三土曜市はにぎわってきた

よ。おいしいヤキトリ屋さん・絵本屋さん...今でも第三土曜市には面白いもの

はたくさんあるけどね。もっと盛り上げられると思うんだよなあ…。吉川君、

キミは西千葉で会社をやっているんだから、いい知恵はないの?」

吉川さん「そんな、急に言われても・・・そういえば去年の子ども起業塾ではうちわで第三

土曜市の宣伝、お花をお客さんに植えてもらってコミュニケーションを取りな

がら会場作り、ボーリングでお客さんを盛り上げて、水鉄砲で打ち水効果と

子どもたちはいろいろ活躍してくれたんですよね」

木村さん「そうだねえーあの時はさらに第三土曜市を盛りあげてくれたね。でもまた最近

地元の人がこんなことを言ってたよ」



- ・知り合いがいないと入りにくいんだよねえ
- ・夏はとにかく暑い！
- ・第三土曜日って何??

商店街の人々「うーん何かいい案はないかなあ……」

そこにふくろう広場を吹き抜ける風がピュー

その風によって一枚のチラシが商店街の人のほうに飛んでいった。



バシッ。そのチラシは海保さんの足に張り付いた。

海保さん「なんだこれ、ん？何か書いてあるぞ。…これは西千葉子ども起業塾じゃないか！

んーやっぱり今年もお願いしようかな！？…みなさんどうでしょう？」

商店街の人々 「いいね」

塾長 「ほんとですか？」

木の陰から塾長あらわる

塾長 「それうちのチラシです！！！」

商店街の人は首をかしげて塾長のほうをみた

塾長 「申し遅れました。私、西千葉子ども起業塾2代目塾長の太田と申しま

す。今年も私たちに任せてもらえますか？」

海保さん 「もちろんだよ！今年は去年よりも、もっと盛り上げてほしいね！」

商店街の人はみんな賛成しうなずいた

塾長「ありがとうございます。それではまた後ほど連絡にまいります」

塾長はどこかへ向かい走り去っていった

こうしてキミたち塾生の物語は始まったのであった。

キミたちの入塾が許可された西千葉子ども起業塾は、本物のビジネス(仕事)を学ぶことのできる場所！

キミたちがビジネスをするのは「ゆりの木商店街」で行われる、「第三土曜日」というイベントだ！

ただのお店やさんごっこは、まったくちがうんだ！！

商店街、第三土曜日が抱える問題を解決する、そんな会社を立ち上げるのが、キミたち塾生へのミッション(使命)だ！

たくさんの人たちと出会い、会社のしくみを学び、たくさん悩んで、なかまと協力して会社を立ち上げる。

…そんなアツい夏の3日間を、過ごしていこう！



さあ、いよいよ「西千葉子ども起業塾」のスタートだ！！

子ども起業家のみんな、一緒にがんばろう！！